

# 国宝清水寺本堂発掘調査と小考

引原茂治

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 国宝清水寺本堂発掘調査と小考

引原 茂 治

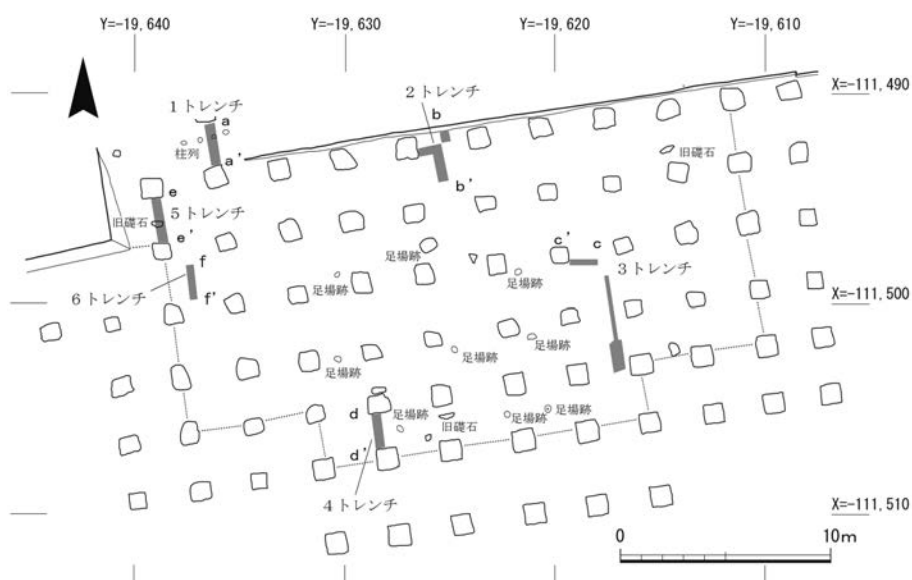
## 1. はじめに

当調査研究センターは、京都府教育委員会の依頼を受け、国宝清水寺本堂ほか8棟保存修理工事の本堂基礎工事に先立ち、江戸時代初期の寛永期に建立された現本堂の礎石の据え付け方や地業のあり方、地下遺構の残存状況を確認するために調査を実施した。平成23年10月18日に調査を開始し、12月9日に終了した。

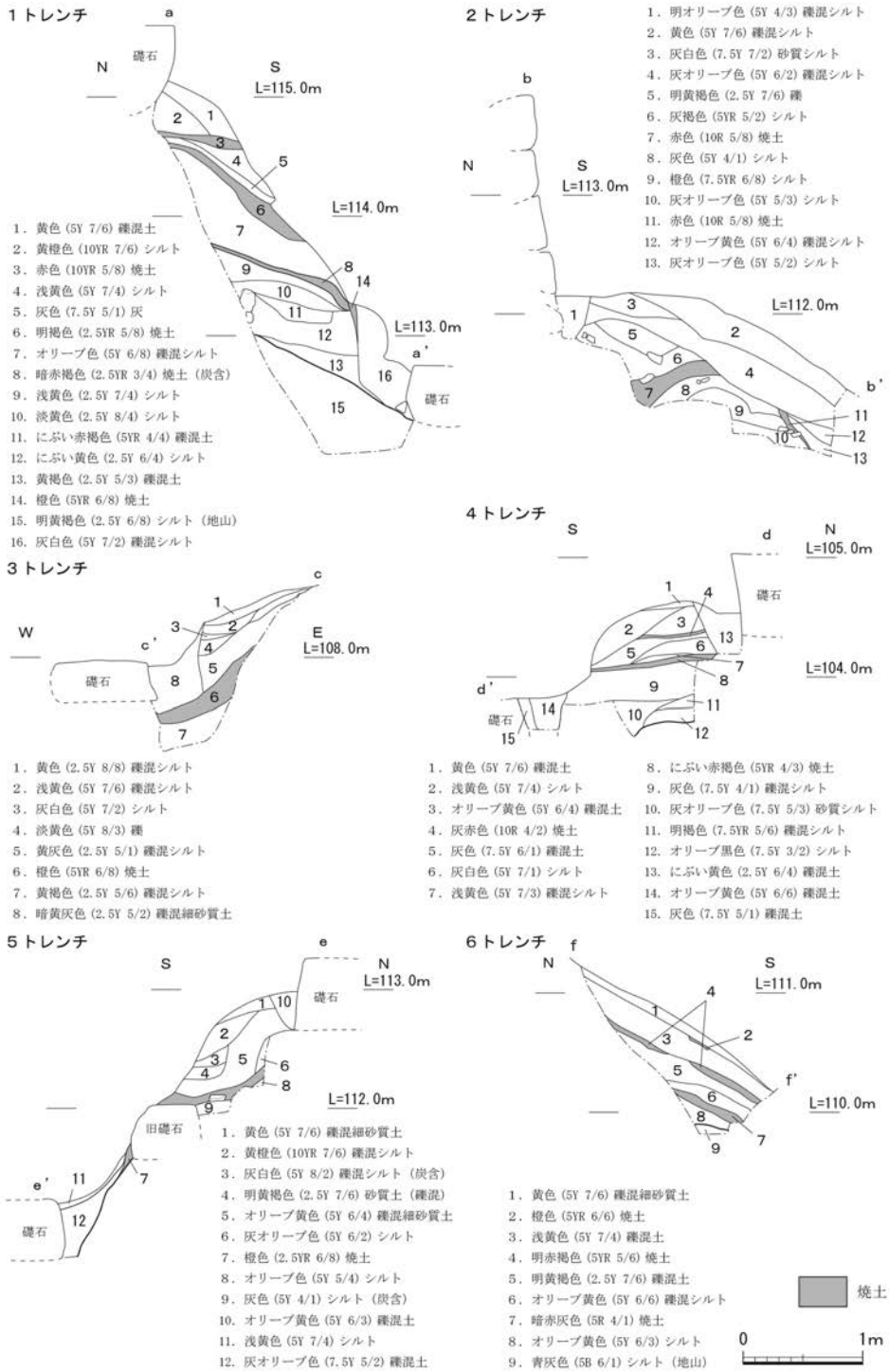
なお、本稿は当該修理報告書に掲載した報文に若干の改稿を加えたものである。<sup>(注1)</sup>

## 2. 調査内容

調査地は、埃状の表土に覆われていた。そのため、足元が滑りやすくなっており、安全確保のため、まずこの表土を除去した。調査当初に予想した通り、遺物も多数含まれていた。その後、地下の状況を知るために必要と考えられる部分に6か所のトレンチを設定して調査を行った(第1図)。



第1図 清水寺本堂下トレンチ配置図(礎石とトレンチの位置)



第2図 トレンチ断面図

調査中に文化財保護課建造物係からご教示いただいたところによると、清水寺本堂は6回焼失している。寛治5(1091)年、久安2(1146)年、承久2(1220)年、貞和5(1349)年、文明元(1469)年、寛永6(1629)年である。このうち、久安2年は当時清水寺の本寺であった興福寺との争いに、文明元年は応仁・文明の乱によるものである。

各トレンチでは、それぞれ、焼土層を確認した(第2図)。複数層の焼土層を確認したトレンチもある。1・6トレンチでは3層、4トレンチでは2層の焼土を検出した。

2トレンチでは、焼土層7層下層の8層から14世紀頃の青磁牡丹唐草文瓶の破片が出土している。このことから、これらの層は、貞和5年の火災後に盛られ、文明元年に被災した可能性がある。また、4トレンチでは、焼土層8層の下層である9・10層から、10世紀頃の土師器皿等の遺物が多数出土している。5トレンチでは、焼土下から旧礎石とみられる石材を検出した。寛永再建時に据えられた礎石のほぼ中間の位置にあり、詳細な時期は不明であるが、中世に遡る礎石と考えられる。

層序が判りやすい1トレンチを参考にすると、1・2層は寛永10(1633)年の再建時の整地層である。3～5層はそれ以前の盛土・整地土とみられる。本堂の被災史からみると、文明年間の火災後に盛られたもので、3層は寛永6年の火災に伴う焼土と考えられる。6・7層は、それ以前の貞和年間の火災後の層で、6層は文明年間の火災による焼土とみられる。さらに下層の8～10層は、承久年間の火災後の層で、8層は貞和年間の火災に伴う焼土と考える。さらに下層で、11・12層と13層の2時期の整地層と考えられる層序を確認している。これらの層の上面は、やや固く締まる。15層は地山の大阪層群のシルト層である。

なお、各トレンチの状況や本堂床下の地表観察によると、本堂西側では固く締まった大阪層群のシルト層を、東側では同じく大阪層群の締まった礫層を基盤として礎石が据えられ、立柱されている。本堂中央部の地面がやや窪んでいる状況がみられるが、これは、シルト主体の大阪層群と礫主体の大阪層群の境目が侵食されて、谷状に窪んでいるものとみられる。寛永期の再建では、瓦片などを含む土をこの谷部に盛り、その上にタタキ状の堅く締った整地土をほぼ全面に敷いて表面を整形している。その後、礎石据え付けのための掘形を設け、礎石を据えて周囲を整地土と同質の土を用い埋め戻す。

### 3. 出土遺物

遺物が多く出土したのは、床下を厚く覆う埃状の表土である。各トレンチからは、範囲が狭いこともあり、遺物の出土は少ない。ただ、最も下方に設定した4トレンチからは、土師器皿を主に多くの遺物が出土したのが注目される。

**土器・陶磁器** 1～14・18は土師器皿である。口縁端部を屈曲させた、いわゆる「て」

の字状口縁の皿である。口径は12～14cmを測る。3 AもしくはB段階に属する、10世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。4 トレンチから出土した。15は同じく「て」の字状口縁の土師器皿である。口径は9.6cmに復元できる。11世紀頃のものか。5 トレンチの近世盛土から出土した。16は土師器皿である。口縁部をやや強くナデ調整する。4 トレンチから出土した。17・19は土師器皿で、平坦な底部から口縁部が斜め上方に立ち上がる形態のものである。15世紀後半頃のものか。20～22は土師器皿で、16世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。23～25は土師器皿で、底部が上方に隆起する、いわゆる「へそ皿」と言われるものである。14世紀頃のものである。26も土師器皿で、小型のものである。1 トレンチの近世の整地層から出土した。

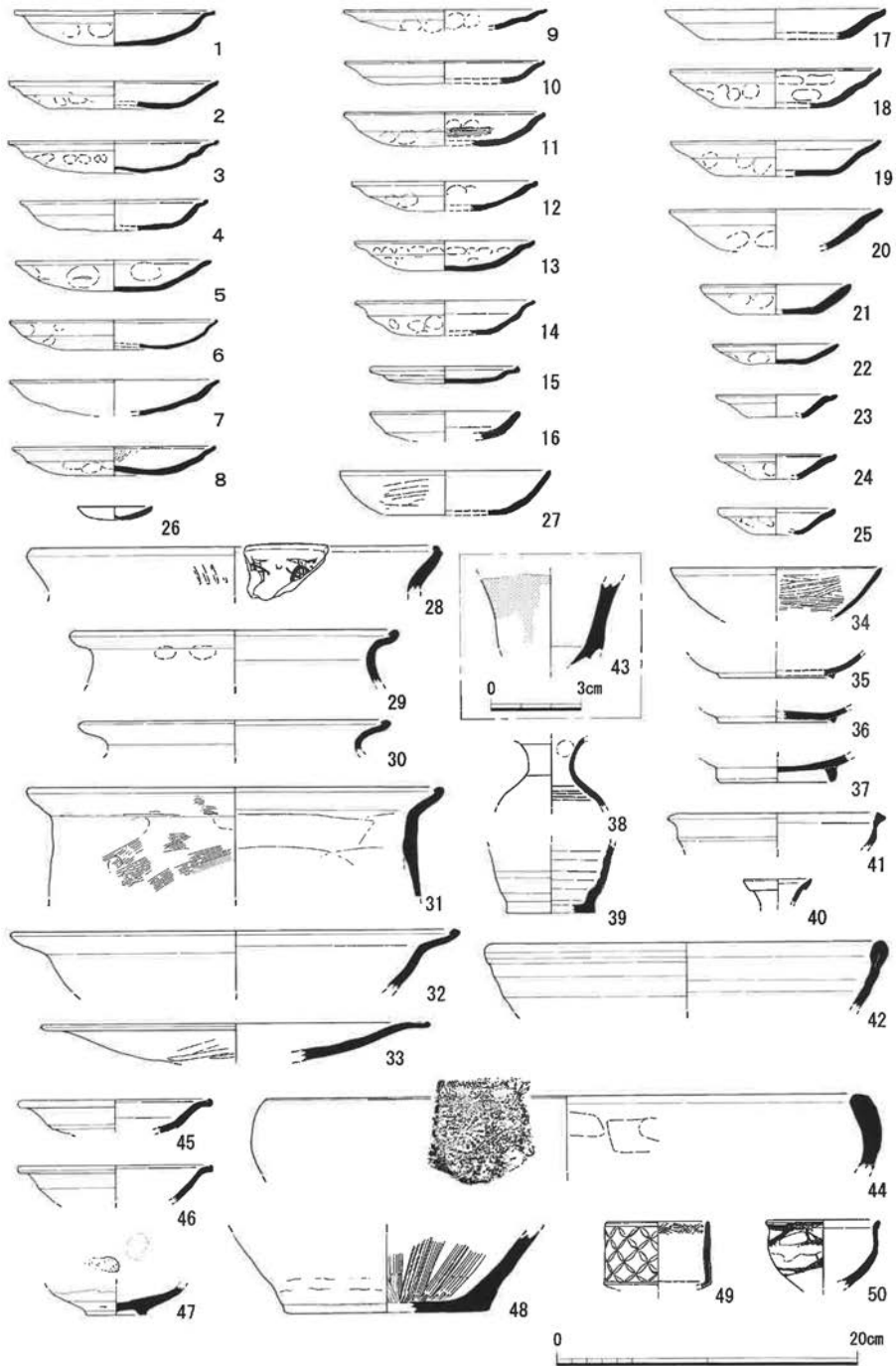
27は土師器杯である。外面ヘラケズリ、内面はナデ調整する。9世紀頃のものか。4 トレンチから出土した。28は土師器甕である。口縁部内面に2ないし3文字の墨書があるが、欠けが多く判読できない。29～31は土師器甕である。4 トレンチから出土しており、10世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。32は土師器鍋である。近世初頭頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。33は土師器高杯で、4 トレンチから出土しており、古代のものである。34～36は黒色土器碗である。内面のみに炭素を吸着させており、いわゆる黒色土器A類である。10世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。4 トレンチ出土である。37は東海系の灰釉陶器である。器種は不明である。高台内に墨書があるが、薄れており、判読できない。

38～40は、須恵器の小形の瓶である。肩は張らずに撫肩気味であり、底部は糸切である。同一個体か否かは別として、いずれも9世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。4 トレンチから出土した。41は須恵器鉢である。口縁端部に面をもつ。9世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。42は須恵器鉢で、口縁端部は折り返して玉縁状になる。10世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。

43は二彩陶器である。緑色および白色の鉛釉が施される。器形は不明であるが、二彩多口瓶の口部の可能性がある。8世紀に遡る遺物とみられる。

44は瓦質火舎である。外面に菊花文を押印する。中世後半期頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。45・46は肥前陶器(唐津)皿である。口縁が折縁状になり、端部をつまみ上げる。17世紀前半頃のものである。47は肥前陶器(唐津)碗の底部である。内面見込みに砂目の目痕がある。17世紀初頭頃のものである。48は信楽産の播鉢である。5本単位の摺目をやや疎らに施す。16世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。49は肥前磁器(伊万里)染付筒形碗である。外面に七宝文、内面口縁端部に四方禪文を描く。18世紀後半～19世紀初頭頃のものである。50は陶器碗で、肥前系の製品とみられる。18世紀後半以降のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。

中国製の青磁が多数出土している。時期的には、13～14世紀頃のもの<sup>(注2)</sup>とみられる。龍泉窯系の製品である。51～69は青磁牡丹唐草文瓶である。調査地全体にわたって破片が多数散布しており、同一個体であるか否かは不明である。大型の細身の瓶で、口縁部は広く外



第3図 出土遺物実測図1 (S = 1/5)

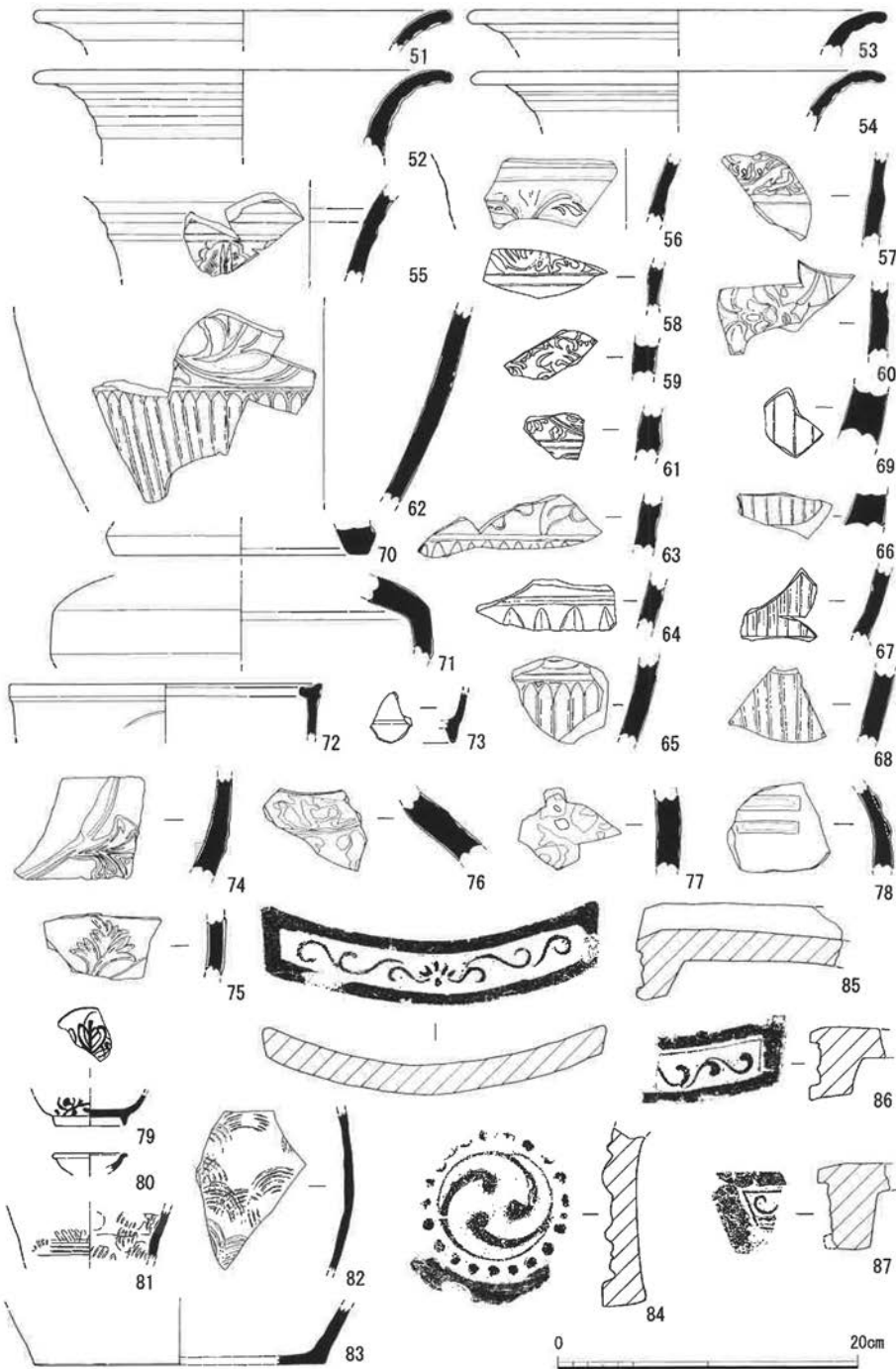
反する。外面口縁部に横線文、頸部に牡丹唐草文、胴部上半に牡丹唐草文、胴部下半に細長い鎬連弁文が巡る。ほぼ同形、同文の瓶に中国元の泰定4(1327)年銘を持つものがあり、この瓶もほぼ同時期の14世紀の製品とみられる。口径は、ほぼ27~28cmを測る。ほとんどが埃状の表土から出土しているが、56・64は、2トレンチの8層から出土している。70は青磁瓶の高台部分とみられる。復原高台径16.8cmを測る。釉色は、上記の瓶よりも青味を帯びており、別個体とみられる。71は青磁壺の肩部とみられる。72は青磁香炉である。復原口径21.0cmを測る。外面に牡丹唐草文を巡らすものとみられる。13世紀から14世紀にかけての頃の製品とみられる。73は青磁香炉の一部で、脚部である。72のような香炉の下部に付くものである。74は青磁片で、断面の形状から牡丹文太鼓胴水指のような器形になるものとみられる。13世紀頃の製品とみられる。75も同様のものとみられる。76・77は、青磁瓶もしくは壺の一部ともみられる。78は、青磁算木文壺もしくは瓶の一部とみられる。

79は、中国製の青花磁器碗である。内面見込みに十文字状の花文を描く。15世紀末から16世紀にかけての頃の製品とみられる。80は褐釉陶器瓶の口縁部で、朝鮮王朝期のもものとみられる。丸味を帯びた形状で、端部は外反する。16世紀頃の製品とみられる。

81・82は、褐釉陶器瓶もしくは壺の一部とみられる。内面に同心円状のタタキ目が残る。器胎は薄手である。16世紀末から17世紀前半頃の、中国南部の製品とみられる。その頃に盛んに行われていた南蛮貿易に伴う交易品の容器として使用された器に類似する。83も同様の褐釉陶器甕とみられる。

中世のものと考えられる瓦も多数出土している。84は三つ巴文軒丸瓦である。尾の長い巴文の周囲を珠文が巡る。85は均整唐草文軒平瓦である。瓦当面が完存する。幅22.8cm・瓦当面の高さ4.8cm・平瓦の厚さ2.0cmを測る。色調は、火に罹ったためか、にぶい黄橙色を呈する。87は唐草文軒平瓦の一部である。唐草文の周囲に圈線が巡る。以上3点の瓦は、寛永期の盛土層から出土しており、中世の瓦と考えられる。86は唐草文軒平瓦の一部である。唐草文の上部及び側面部に圈線が巡る。15世紀頃の瓦とみられる。本堂は椽皮葺であり、出土した瓦は、確実に本堂に伴う遺物とは言い難い。本堂に隣接し、共に被災した本瓦葺の朝倉堂に使用されていた瓦が含まれている可能性も考えられる。

**木製品** 近世の遺物としては、巡礼札などの木札がある。88は北側奥の石垣の隙間に2つ折りにして差し込んだような状態で出土した西国三十三ヵ所の巡礼札である。札の表面には、中央に「□[奉々]納西國三拾三處巡禮」、右側に「享保十四酉天」、その下に「同行十一人」、左側には「二月十八日」、その下に「願主浄信」と記される。享保14(1729)年の奉納である。裏面には「為 おはな 妙春信女」と書かれており、浄信が身内の女性の供養のために納めたものと考えられる。頂部山形の木札で、下端は隅切される。上部中央



第4図 出土遺物実測図2 (S = 1/5)



が穿孔される。長さ14.5cm、幅3.3cm、厚さ0.15～0.3cmを測る。89は表土中から出土した西国三十三ヵ所の巡礼札である。表面には、上部中央に梵字「キャ」が記される。ちなみに、「キャ」は十一面観音の種字である。その下に「本州西国卅三所巡礼」、さらにその下に「同行十一人」と二行に書かれる。右側には「元禄十六年二月吉日」、左側には「播州加西郡別府村勘右衛門母」と奉納者名が記される。元禄16(1703)年の奉納である。裏面は無地である。頂部山形の木札で、上部中央が穿孔される。長さ15.2cm、幅3.3cm、厚さ0.2cmを測る。90は中央に「御千度札」と書かれており、その右に「三百卅五枚之内」、左に「札願主たんす定」と記される。裏面には上部に「願主」と横書で記され、その下に「宇治屋伊八郎 同娘奈み ッ孫多禰」の名が三行に記される。年号等はない。四方隅切の小型の木札で、長さ5.8cm、幅2.75cm、厚さ0.35cmを測る。91は奉納札で、表面に「奉納 山本彌兵衛」、裏面には「京(朱書) 五百枚之内」と記される。年号等はない。長方形の木札で、長さ12.7cm、幅2.35cm、厚さ0.1～0.2cmを測る。92は竹製で、片面のみに墨書される。上下を欠損しており長さ不明である。幅1.3cm、厚さ0.15cmを測る。93は板材の一部とみられる。墨書は不明であるが、「音羽」の可能性が考えられる。94も板材の一部とみられ、「□六兵衛」と書かれているものとみられる。

**金属製品** 95は元豊通寶で、北宋銭である。96～99は寛永通寶で、いわゆる「古寛永」である。100は寛永通寶で、いわゆる「新寛永」である。101～103も「新寛永」で、101・102には裏面に「文」字が、103には「佐」字が鋳出される。104は大正八(一九一九)年の一銭銅貨である。

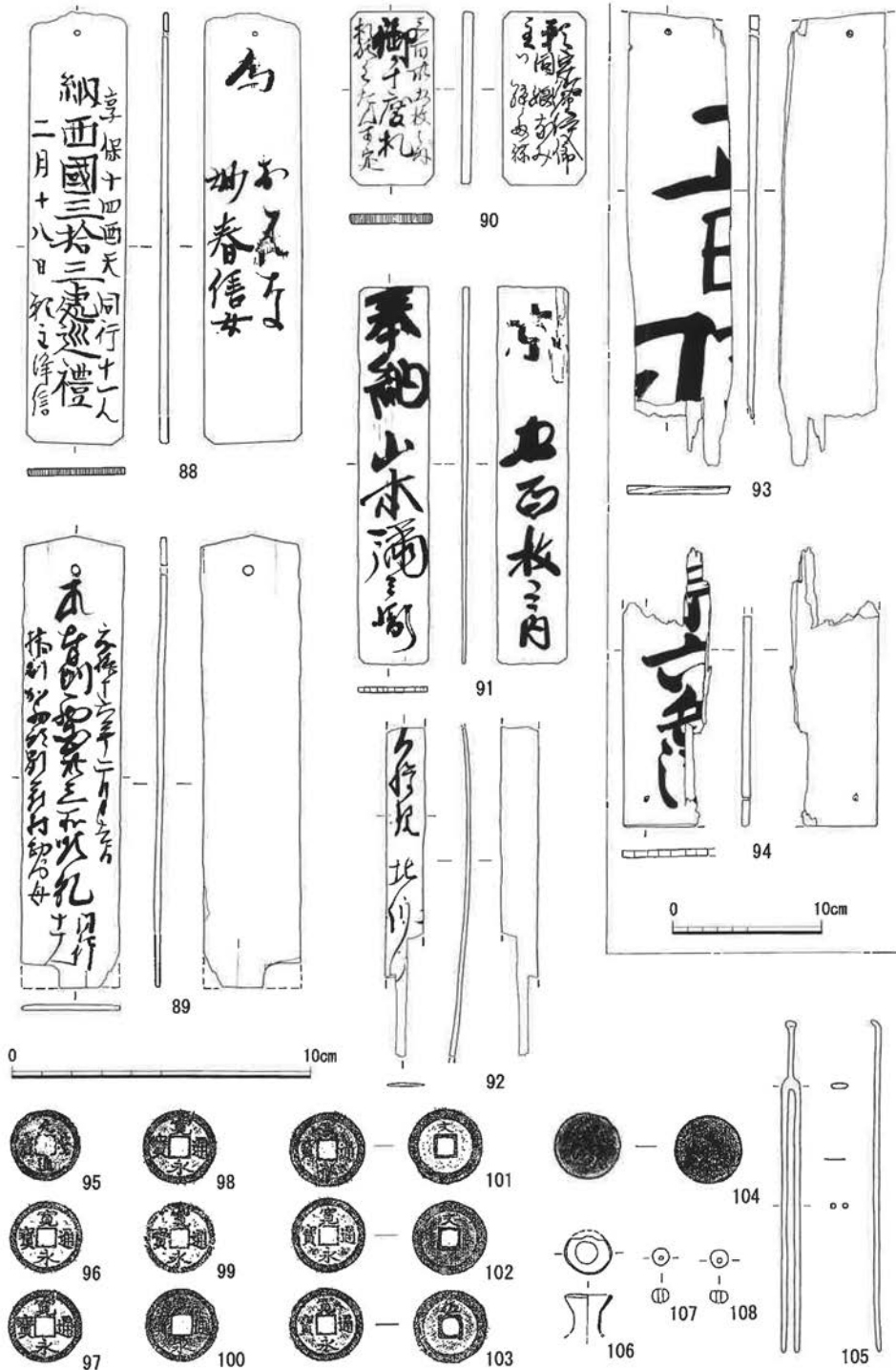
105は銅製の簪である。先端部が耳かき状になる。長さ11.25cm・幅0.6cm・厚さ0.2cmを測る。

**ガラス製品** 106は小形の瓶の口頸部である。口径1.6cm・厚さ0.08cmを測る。色調は緑味を帯びた褐色を呈する。用途は不明である。107・108は小玉である。107は、径0.55cmを測る。色調はいわゆる水色である。108は径0.6cmを測る。色調は白色である。これらの小玉の用途は不明であるが、数珠玉の可能性もある。

#### 4、まとめと小考

今回の調査では、部分的ではあるが、本堂床下の状況を確認できた。旧礎石と考えられる石材なども残存しており、寛永期以前とみられる柱列跡も検出している。本堂の地下には、さらに古い段階の遺構が、良好に残っている可能性が考えられる。

遺物については、まず注目されるのが二彩陶器(43)である。国産の軟質鉛釉陶器で、いわゆる奈良三彩、奈良二彩と称されるものである。仏器を主体として生産され、古代寺院跡からの出土例が多い。木津川市神雄寺跡では、小規模な寺院であるが、軟質鉛釉陶器が



第5図 出土遺物実測図3

多数出土している。<sup>(注3)</sup>また、奈良東大寺正倉院に伝わる軟質鉛釉陶器も、仏器が多い。この二彩陶器は、8世紀に仏教に関する宗教施設が、この地及び付近に存在したことを示唆するものとも考えられ、興味深い遺物である。清水寺は、寺伝によると、開創は宝亀9(778)年のこととされる。この寺伝を、考古学的に裏付ける資料という位置付けも考えられる。

次に注目されるのが、褐釉陶器(81~83)である。いわゆる南蛮貿易に伴う交易品の容器と考えられるものである。収められた交易品については、薬種としての蜜類の蓋然性が高いという指摘がある。<sup>(注4)</sup>寺院では、同じく交易品である香料と蜜類を混ぜて作られた丸薬が日常的に施薬されていたことがわかっており、寺院からの交易品の容器の出土については、日常的に施薬を行っていた寺院が、薬種としての蜜などの交易品を容器ごと購入していたことによる、と考えられている。清水寺馬駐跡の発掘調査でも、南蛮貿易に伴うと考えられるタイ産の壺片が出土している。<sup>(注5)</sup>このような交易品の容器の出土は、清水寺でも施薬が行われていたということをも語る資料の可能性もある。

巡礼札(88)は、裏面に女性の戒名と俗名が併記されており、同一人物のものともみられる。表面に記載されている願主の浄信にとって、身近な女性であったと考えられ、供養のために書かれたものであろう。この札が出土したのは、「清水の舞台」床下の最奥部で、なおかつ、中央部である。場所的に、偶然に札が落ち込むことは考えられず、意図的に持ち込まれた可能性が高い。床下内では、秘仏本尊の足下に、直線的に最も近い位置である。このような状況からも、意図的に石垣の隙間に差し込んだ可能性が考えられる。特殊ではあるが、供養の形態の一例として、興味深い。

(ひきはら・しげはる = 当調査研究センター副主査)

注1 島田豊ほか2021『国宝清水寺本堂ほか八棟修理工事報告書』第7集 京都府教育委員会

注2 平尾政幸2019『土師器再考』『洛史』研究紀要第12号(公財)京都市埋蔵文化財研究所

注3 (公財)京都市埋蔵文化財調査研究センター2010「(1)馬場南遺跡第2次」(『京都府遺跡調査報告集』第138冊、木津川市教育委員会2014『神雄寺跡(馬場南遺跡)発掘調査報告書』木津川市埋蔵文化財調査報告書第16集

注4 小田木富慈美2020「近世における輸入コンテナ容器の流通と消費に関する考察」『研究紀要』第21号 大阪市文化財協会

注5 白石悦二・岡本公秀2012『国宝清水寺本堂ほか八棟修理工事報告書』第1集(馬駐・本坊北総門) 京都府教育委員会

#### 参考文献

『世界陶磁全集』12 宋 小学館 1977

『世界陶磁全集』13 遼・金・元 小学館 1981

中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 2000